Choho

長崎大学広報誌
［チョーホー］

長崎大学
NAGASAKI UNIVERSITY
ISSN 1347-7994
Winter
Vol. 42

特集

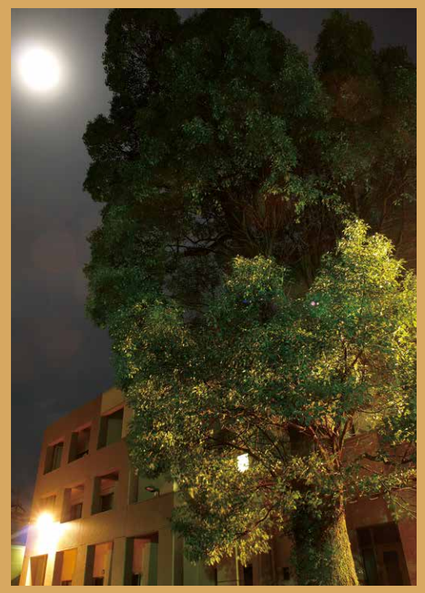
長大生、リレー講座に挑む

Nagasaki University Exciting Students

Choho 長崎大学広報誌［チョーホー］ Vol.42 長崎大学ホームページ http://www.nagasaki-u.ac.jp/

学びの森の風景

Scene 4



夜9時すぎ。ぽっかりと浮かぶ月に照らしだされた大木の下を「お疲れさまー」「きつかったねー」と挨拶を交わしながら通り過ぎる学生たち。ここ、片淵キャンパスにある経済学部には、学部では唯一「夜間主コース」が存在します。昼間は働き、夜間に学びにくるがんばりやさんの彼らをいつも見守っているのが、このクスノキなのです。　撮影:沖田夏樹（経済学部 職員）

学長室だより

“知のぶつかり稽古”

今年の長崎大学リレー講座も、大好評のうちに幕を閉じました。一昨年の初回から数えて3回目。リレー講座は長崎の秋冬の恒例イベントとして、すっかり長崎市民の間に定着したようです。

この間、東日本大震災を挟んで、この国の風景は大きく変わりました。それとともに、リレー講座の論点も移ろいました。世界の構造転換の中での日本の進路を考えた初回。大震災後の混乱の最中開催した第2回は、自らの頭で考えることの重要性が語られました。そして今回のテーマはグローバル。世界のボーダレス化が急速に進む一方で混迷を深めるこの国が未来への展望を拓くためには、世界と真正面から向き合うしかないという切迫感が背景です。

今回は大きな変化がありました。聴衆の中の若者の割合が大幅に増えたのです。それを牽引したのは、学部横断の長大生有志が仕掛けたリレー講座講師と学生たちとの討論会でした。毎回の講座本番前の1時間、トップ人材講師に学生たちが論戦を挑むという試みです。黒川清さんとの会を拝聴しましたが、必死でぶつかってくる学生たちを、黒川さんも真剣に受け止め、跳ね返し、いなし、そしてたまには肯くといった、いうなれば“知のぶつかり稽古”の観を呈していました。

地域社会と大学の知の接点の構築という観点でスタートしたリレー講座に、若者たちの知の鍛錬の場としての意味が加わりました。長崎大学リレー講座は確実に進化しています。

黒川さんは、「若者はとにかく海外に翔び出せ。英語が通じなくても喋り続けよ。求め続ければ必ず自分の夢が見つかる」と檄をとばされました。その言葉をしっかりと受け止めた学生たちが、やがて世界に雄飛する図を想像するだけで、嬉しくなります。

長崎大学長　片峰　茂

特集

長大生、リレー講座に挑む

Nagasaki University Exciting Students

すっかり秋冬の恒例行事となった、長崎大学リレー講座。今回のテーマは「長崎からグローバルを考える」。そしてこのリレー講座のゲストに長大生がチャレンジ！暗中模索を繰り返しながら果敢に挑戦していった先に見えてきたものは…？

「長崎大学リレー講座2012」のプログラム

長崎からグローバルを考える		
10/27	米大統領選と中国指導部の交代が日本に与える影響	講師 マイケル・グリーン
11/1	世界で戦うということ ～侍ハードラーからの提言～	講師 為末　大
11/7	グローバル人材育成に対する期待	講師 北城恪太郎
11/16	グローバル時代に求められるもの ～マクドナルドの改革より～	講師 原田泳幸
12/5	福島原発事故で明らかになった日本的システムの限界と今後	講師 黒川　清
12/19	世界の中で求められる新しい日本人像	講師 寺島実郎

CONTENTS

長崎大学広報誌
［チョーホー］
Choho Vol.42

本誌記事を長崎大学関係者が転載する場合は、「長崎大学広報Choho ○号から」と明記してください。学外の方は、事前に広報戦略本部までご連絡願います。

学長室だより	“知のぶつかり稽古”	1
特　集	長大生、リレー講座に挑む	2
	今、熱い！ 長崎大学とケニア 第2弾	11
大学はわたしの仕事場	齊藤幸枝	19
Information	Information	21
	長崎大学「通」クイズ	22
	編集後記	22

表紙のはなし

リレー講座が開催された中部講堂をバックに集合した、白熱プロジェクトの面々。左から飯田航生さん（経済学部）、青木大輔さん（経済学部）、藤田桃子さん（医学部）、江島健一さん（医学部）、田尻美佳子さん（長崎県立大学）、岩本論さん（環境科学部）、宮城舜さん（環境科学部）。

長崎大学白熱プロジェクト 始動！

Nagasaki University Exciting Students

世界で活躍できる人材ってなんだろう どうしたら議論を沸騰させられるの？

「チャンスは自分でつかむ、大学生なんだから」

ことの始まりは昨年一月に行われたNHKの「白熱教室※in長崎大学」。人気企画が長大文教キャンパスで行われたのです。しかし結果は「白熱というより、微熱？」。三ヵ月後、今度は長大医学部の高村昇教授による公開討論会が開かれます。その後、この討論会に参加した学生たちは、一つのチームを旗揚げします。その名も「白熱教室プロジェクト」。

リーダーの江島健一さん（医学部）は語ります。

「白熱教室が行われるとき、大学側は集客も内容も不安だったらしく各学部から数人ずつ呼んで学長がハッパをかけていたようです。でも本番では不完全燃焼に終わってしまった。参加した学生たちは、もっと議論を深められたのに、と相当な危機感を持ちました。そして高村先生の討論会。終わって、やっぱりこれは継続的な何かを、大学側じゃなくて自分たちでやらないとダメだ、大学生なんだからチャンスは自分でつかまないと…という声があがり、プロジェクトを立ち上げました。学長も応援すると言ってくださいました」。

とはいうものの、まずは人集めで三ヵ月経過。

「有名人を呼んで単発イベントをやろうと思えばできたかもしれない。でもそれは継続じゃない。そこで、大学内でリーダーシップをとっている学生に声をかけ、小規模な勉強会を行って、そこからちょっとずつ広げていきました」。

こだわっていたのは継続性。

「継続性のない変革ってあっという間に消えちゃうでしょう？ 自分自身、医学部で学びながら医療を変えたいな、と思っています。でもすごくハードルが高い。ならば少しずつ同じ世代の人たちと接しながら思いを共有していく。みんなが変化を望んでいれば、僕らが臨床をやりだしたときにボトムアップで変えられるかもしれない。何かを変えようと思ったら、やっぱり継続性。細くても長く続けていく、それも既得権益のない学生のうちに、と考えました」。

討論会や勉強会を通して、ファシリテーターの役割や議論を盛り上げる手順など、手探りながら少しずつ見えてきたような。そんな折、秋からのリレー講座の開催を知りました。

「へぇ、すごい人たちが来るんだ…ああいう人って少し早めに入るから、そのとき学生と話したりできないかな…と。最初はアイデアだけ。でもゲストの顔ぶれを見るほどに、これは実現できたらすごい。それで学長にお会いしたときに、思い切って切り出したんです。まあ、あの…若干無理やり感はありましたが（笑）」。

結果、学長からGOサイン！ それまでの地道な努力が功を奏したといえます。日頃絶対に会えない人々と生でやりとりすることで、刺激され気づきを得られるかもしれません。

「メンバーはみんなそこそこ物を言う人たち。まずは担当の回をそれぞれ充てて好きにやってみようということに。誰だって雑用はやりたくない。好きにやっていいというチャンスが欲しいんです。そのためのバックアップを組織で行います」。

各自ターゲットを絞って、著書を読むなど下調べが始まります。

「初回は講演後のセッションなので、講演後に『学生残って～』と呼びかけてもらおう」。

「どのくらい来るか数次第だけど、舞台に全部上げる？ 舞台と客席に分けるか」。

そんなこんなで、いよいよ初回スタート。

※「白熱教室」とは、アメリカ・ハーバード大のマイケル・サンデル教授が始めた討論型講義。数年前NHKが取り上げ放送、あるテーマにおいて、多様な考えの学生が意見を交わし議論を深めて理解しあう、その白熱したようすが視聴者の大きな反響をよびました。その後コロンビア大編や東大編など、シリーズで放送。今回の「白熱教室in長崎大学」では元NHK解説委員の小出五郎氏を迎えての討論でした。

写真は右から許嘉仁さん(経済学部)、リーダーの江島さん、日隈恭太郎さん（工学部）、桐山智大さん(経済学部)。

プロジェクトメンバーはそれぞれ学業にバイトに大忙し。そこでSNS（インターネット上のネットワークサービス）の一つ、facebookを利用してコミュニケーションを図っています。その生き生きとしたやりとりを一部抜粋してみました。

10月12日　ハイライト

お疲れ様です。報告です。**Choho**っていう長崎大学の雑誌知ってますか？ あの1月号の編集会議がさっきあって、参加していいよってことで顔を出してきたんですが、**リレー講座**で学生ディスカッションする件を話したところ、他のメイン特集まで決まっていたんですが、変更して、**［リレー講座×学生］**みたいな特集ということになりました。メリットが大きいと思ったので、記事にしてもらうことをお願いしました。〈青木〉

うお～^^♡♡♡**激アツ**やねっ^^♡やりたいやりたいやりたい～^^♡やっぱりバイト休んででもくればよかった～(;;)!!! 〈藤田〉

あと経済学部のPALLETの人間も何人かこの企画に興味を持っています。次の会議に何人か参加させても大丈夫ですか？〈青木〉

今回の**mission**の走り始めなので、いいと思いますよ、ゴールを共有しましょう。ちょっと**白熱PJ**の皆さんには未だ全貌を明らかにしていなくて、飛躍感はありますが、じわじわよりも、僕らが感じた喜びを感じてもらいたいので(*^_^*)〈江島〉

10月29～30日（第1回を終えて）

ある程度の意思共有のために**フリップ**とか面白いんじゃないか。テレビ番組的だけどみんなの意見が見られるし。**ザ・テレビっ子**的考え(￣▽￣)笑 〈桐山〉

フリップ面白いかも!!^^
てれびっこ最高ww 〈藤田〉

テレビっ子ばんざーい(￣▽￣) 〈桐山〉

集まった人も挙手も多かった。内容はともかく、これからもっと**面白くなるだろう**とわくわくしました！ 〈岩本〉

つうか、**白熱させたーーーーい!!!!!!!** PALLETメンバーは熱いので、白熱メンバーよろしくお願いします！ 〈青木〉

私、北城さんの回やります。経済学部の別のイベントとかぶってるんだけど、希少性という意味でこっちを優先させようか、と。〈田平〉

キタ――――(゜∀゜)――――!!
〈江島〉

Start!

緊張のなか始まったトークセッション 議論は白熱するのか!!

Nagasaki University Exciting Students

学生からの質問は、留学からTPP、原発問題まで幅広過ぎて、少々散漫な感じに。

十月二十七日

マイケル・グリーン氏

高校生も参加！しかし会場の設定に問題あり!?

第一回は開催まぎわの決定だったので、今回のみ講演後にトークセッションを催すことに。ファシリテーターの江島さんと藤田桃子さん（医学部）もスーツ姿でスタンバイ。まず行われたグリーンさんの講演では、日米関係や中国、アジア太平洋の国際問題が斬新な視点で語られました。その熱気も冷めやらぬままのトークセッション、呼びかけに応じたのは高校生を含む三十五名ほどの学生。そこで舞台上にゲスト、客席前方に学生が集まった形でスタート。テーマは「グローバル化する社会の中で私たちはどうすべきか」。最初はおとなしめだった学生も、だんだんと手が挙がるように。学生からは「一生懸命勉強して世界で戦っていけるようにならなければ」。それに対してグリーンさん「日本って素晴らしく安全だし外国語を覚えてなくても生きていける。でもグローバルを考えるとき外国語は大事だね。ここ十年、日本から外国への留学は半分に減っているのが寂しい」。学生からの「中国の若者は怖いイメージがある。グリーンさんから見て、日本と中国の若者の違いとは?」という質問には「私はアメリカの大学でも教えています。最近圧倒的に増えた中国の留学生は、尖閣諸島問題について最初は『けしからん!』と感情的なのに、しばらくたつと『自分の国では教えてくれないことが多くて面白い』という反応に。日本人の留学生はおとなしいね」。だんだんと議論が活性化してくると、学生からは「国によってグローバルな舞台で活躍する人、ローカル経済で生きていく人もいる。自由貿易についてアメリカは、どういう裁量で考えているのか」といった、グリーンさんをして「非常に難しい質問だ!」と唸らせる切り込みも。しかし、深い突っ込みが入ったところで残念ながらタイムアウトに。

あっという間の四十分が終わってからの反省会では…?

・講師との距離が遠過ぎて目線が合わない

・効率いい進行のために情報や意識の共有が必要

・参加した学生同士がやりとりできるように進行側が工夫すべき――などがあげられました。学生側の発言は多かったけれど講師の話も長く、整理されずに終わってしまったようです。

十二月一日

為末　大氏

人生における〈勝ち〉っていったい何?

セッション開始の三十分前に集合した学生たちは十名。なかには「どうしても会いたい」と佐賀大学から駆け付けた学生も。リレー講座の六人のゲストのなかでは為末さんが年齢的に一番近いこともあり、一同少々興奮気味。「皆さんはなぜ為末さんが侍ハードラーと呼ばれているか知っていますか?」という、ファシリテーターの田尻美佳子さん（県立大）と宮城舜さん（環境学科部）の問いかけからスタートしました。配布資料もあり、事前の情報共有もばっちり。前回の反省が活きています。「世界の学生に打ち勝つために必要なこと」に対する考えを、それぞれがフリップに書いて説明している途中で、ご本人が登場。

「好奇心」「自分の武器、強み」「世界基準を知ること」。次々発表する学生の意見に、自身でも学生セミナー「為末大学」を持っているだけに、真摯に耳を傾ける為末さん。「強みって書いてる人三人いるよね。僕もそう思う。日本の教育はなんでも平均的にできる人を育てようとするけれど、もうこれからは一点に特化する、自分にとってその一点が何なのかを知ることが大事なんじゃないかと思っています。得意じゃないことは、人にまかせてあきらめる、くらいのね（笑）」、するとメンバーの青木さん「その一点が何なのか。大学生活中に探しておきたいですね。例えばサッカーでもどこが自分の適性ポジションなのか、いろいろ乱れ打ちというかチャレンジしてみて、楽しくて成果が出たところを見つけるような」。すかさず為末さんが「自分はフォワードだと思っていたら、周りからディフェンダーだよ、なんて言われたり。人の意見を聞くのも大事だよね」。「でもそれを見つけるための具体的な方法ってなんだろう?」とファシリテーターの宮城さん。「うーん、あなたはどう?」と為末さんが周りに振っていきます。あれ? 立場が逆転?? 参加した学生全国や世界レベルになるとかなわない。すると強みが見えなくなるんです」。これには「そう、ぼくも世界に出てみるとまわりは凄まじく速いわけ。でもそういう時は新しいゲーム、ルールを作る戦いがあってもいいよね。iPhoneもそうでしょ? 新しいメソッドの協会を作って認定する、基準を作るために外に出て戦うという考え方もあると思う」。

たくさんの名言がありました。実はこれ、本番の講演では出てこなかった言葉ばかり。「好きなことを強みに、といっても、好きにもいろいろある。どうして陸上が好きなのか。努力するのが好き? 目立つから好き? 勝つから好き? 〈好き〉の因数分解をしてみよう」「陸上で世界一を目指しているときが一番いい。だから僕はもう一回挑戦したい。山頂を見たいから山に登る。でも山に登るために山頂を決める世界もある」。議論では、まず仮説の意見を言ってみる。決めつけないで撤退の余地を残しておくといい。言い合いのときは相手を刺し過ぎない、空気を読み過ぎないのも大切」一同、ああ～と納得。後半、為末さんからみんなへの問いかけが。「人生における勝利条件ってなんだと思う?これを考えると見えてくるよ」。お金、夢、幸せ。どちらかを選ぶ場面で譲れないものは何か。これは参加者への宿題になったよう。

人数を少なめに抑えたことで、議論は深まりました。でもこれは為末さんの優しさに依る部分も多かったのかもしれません。しかし大学側からは「十名は少なすぎ、もっと増やしたら」とアドバイス。人数が増え過ぎれば錯綜するし、難しい課題が残りました。

11月7日　ハイライト

ねーねー!!4回目のマクドナルドの**原田社長**、文教**近くのマック**でできないかなー!?(°o°)そしたら面白くないっ!?(^q^)笑　〈藤田〉

確かに!おもしろい笑　〈岩本〉

うわぁ～、それ**めっちゃウキウキ**しそう(;￣O￣)行きたい_￣|○　〈桐山〉

めっちゃ面白そうです!!**店員はすごいプレッシャー**でしょうけども(笑)〈日隈〉

見事にこの案は、受け入れられませんでした。残念!　〈江島〉

笑　ですよね～!^ ^　〈藤田〉

11月15日　ハイライト

黒川先生の勉強会を行おうと思ってます。今日のMTGでも話しましたが、原田さんの回に来てくれる人に**フライヤー配りたい**。添付しときます。たたき台なんで、どんどんたたいてください。〈江島〉

なんか**オシが弱い**気がする…。これをもとに私もあんま変わらんかもけど考えてみます!　〈藤田〉

あざざす!　**勧誘文章**書くの苦手なんよね^^;　是非協力お願いします!　〈江島〉

てゆか、**既に英語が読めない件**・・・(;;)笑　今日を楽しめ?つかみとれ?ねね!これは、勉強会に重きをおいた告知にするのか、当日に重きをおいた告知にするのか**わからんくなってきた～(><)!**いや、結局どっちもなのかもだけど…。とりあえずこれね^ ^ →来たる12月5日に開催される長崎大学リレー講座のゲストは、なんと!あの黒川清先生!そして、今回もリレー講座の前に白熱projectはゲスト×学生でセッションをやっちゃいます!黒川先生を知ってる!という方も、知らない!という方にもおすすめのこのイベント、先生と当日**白熱したセッション**するためにもぜひ!このイベントへの参加もお待ちしております!　〈藤田〉

invitedって書いてありますし、原田さんのに来てる人に配るのであれば、もうちょっと招待状感を強めに出すと誘われてる側は特別感が出ていいかもと思いました^ ^!!文も、「ぜひこのイベントにあなたのご参加が必要です・お待ちしてます」的な。　〈桐山〉

よりセッションを充実させるために…のところを　なんで毎回やってるのかって??そりゃあ**刺激のある大学生活**にしたいからさ!!なのはどう??　〈青木〉

目的はセッションを充実やけど、その先の目的は**刺激的**にするためやんなー〈江島〉

Step up? 中盤戦!! 炎上まであと一歩!

Nagasaki University Exciting Students

十一月七日 北城恪太郎氏

ゲストとの距離が詰めきれないあせり

だいぶコツがつかめてきたメンバー。田平由布子さんと岩本論さん（共に経済学部）がファシリテーターに挑みます。参加者は二十名、テーマは少し切り口を変えて、国際社会で活躍する学生を教育するため「もしあなたが学長だったらどうする?」。スタートがバタつき、参加者がフリップに書いている間にご本人到着。学生が順に意見を述べていきます。

「一年次の教養教育で日本のことをしっかり学ばせる。留学も最低二ヵ月間義務付ける」。北城さんは「外国人と仕事以外で会話するとき、確かに日本の歴史を知らないとホント恥ずかしい、特に戦前戦後の歴史。それから留学は一ヵ月お客さんで行くより最低一年、単位も取ること」。別の学生「入学定員を減らして授業料無料化、勉強しない学生を有料にしては」。「それ、すごく難しい、授業料は誰が払うの?国?借金だらけだよ。大学に行かない人が行く人の支援するの? 私学にやる親が国立の支援するの?」現実を見据えた意見でバッサリ! 自身も苦手な英語を克服して国際舞台で活躍している北城さん。「日本人の英語力は中国、韓国に比べ、ものすごく低いけれど、英語が話せればコミュニケーションOKかというとそれも違う。一方的に自己主張ばかりするのは外国人は嫌いますね。相手の理解度を考えながら会話で説得していく努力が必要」。そこに学生が「英語は大事だけれど、教育システムが問題では。例えば長大生のTOEICが○点上がると教員の給料が上がるとか、インセンティブを付ける。教員の評価を研究より学生への貢献で測る方がいいと思うんです」と発言すると「うん、僕もその通りだと思う。実際そういう大学では学生の満足度は上がるよ」と北城さん。お、クリーンヒット! 田平さんは議論を切り替えようと果敢に挑戦し「どういう大学にしたいかという問いは、それって実は自分が変わりたいという裏付けになるのかなと。例えば大学の英語を充実させたいということは、自分に語学力が必要だという…」と発言。しかし北城さんに「忙しいといって勉強しない人はヒマになっても勉強しないって中国では二〇〇〇年前から言っている。要は英語も自分で時間を作って勉強するしかない」と軽く流され、幕。

終わってからの反省会。

・テーマはよかったのだが、もう一歩「炎上」まで行けなかった

・ゲストとの距離を詰めきれなかった

・切り替えができず終盤までずるずるいってしまった

・この企画にメンバーとしてどれだけ関われたか?

しかし回を重ねるごとに意識の高い参加者が確実に増えてきました。

北城さんのスピード感あふれるコメントに、すっかり飲まれてしまう場面もありました。

十一月十六日 原田泳幸氏

事前のグループワークでホットなやりとり

「ただ今満席になっております」と場内アナウンス。夜九時半、ここは長大そばのマクドナルド。プロジェクトの打ち合わせで集まったものの、席を取るのも一苦労というくらい人気のマクドナルドの社長が次のゲストです。「今回は参加希望者が多いから、事前グループワークから始めよう」と担当の青木大輔さんと飯田航生さん（共に経済学部）は、リハーサルするほどの念の入れよう。

四回目は九十分のグループワークから始まりました。今回のテーマは「リーダーに必要な要素とは?」、五人一チームで五班に分かれ、結論を一言で模造紙に書くことに。「カリスマ性かなぁ…でもカリスマの定義ってなんだ?」「全体を見渡せる視野とか」「この人から言われたらしょうがないな、みたいな」「やっぱり傾聴力でしょう」「常識ある非常識ってどう?」。あちこちで声が上がり、シンプルマップ化するチームも。各班にはプロジェクトメンバーが一人ずつ貼りつき発言を引き出していきます。議論がまとまったところで原田さん登場。

いきなりプレゼンに入ろうとしたところ、「先に背景とか、どんな学生が集まっているか説明をして」という大学側からのアドバイスを受け、青木さん、あわてて紹介。一つ発表が終わった時点で原田さんからのコメントをもらおうとすると「いや、僕がここでコメントすると後の発表に影響を与えるから（笑）、一気に聞きましょう」と原田さん。そうだ、前回の轍を踏んじゃいけない! 結局全チームが発表してからアドバイスしてもらうことに。彼を囲んでみんな床に体操座り、目線がしっかり結ばれます。まず言われたのは「どれも間違っていない、でもどれにも欠けているものがある。リーダーシップって、柔軟な思考で社員一人ひとりをよく見て、彼らのパフォーマンスを最大にするために自分がどうしたらいいか、その自己管理能力が一番大切なんだよ。マネージメントは忍耐だよ。許す、受け止める」。部下から学ぶことがない組織は死んだも同然。私にチャレンジしてくれる人材を周囲にどれだけ揃えるか。アップルコンピュータ社長を経て日本マクドナルドへ。そして改革をしながら八期連続で売上を伸ばし続けたという原田さんが真ん中で穏やかに語りかけ、夢中で耳を傾ける学生たち。「人間の一番のモティベーションってなんだと思います?うちにはアルバイトクルーが十七万人いるんだよ」という原田さんの問いに、「責任感でしょうか。自分がやりたいことをやらせてくれるような」と答えたのは江島さん。「うん、成長ね、いい仕事をやらせて成長させること。その人の可能性を見ながら伸ばすの」と原田さん。そこで江島さんさらにつっこんで「僕らのディスカッションでリーダーにはカリスマ性が必要だという話が出ました。型破りな想像力とか先天的なものなんでしょうか」と質問。「私はアップルにいるとき、スティーブ・ジョブズをはじめ性格の全く違う四人のCEOの下で仕事をしました。ジョブズは天才。でも経営者かというと…? 四人それぞれタフだったり、型破りだったり。リーダーシップも求められるもので違う」とズバリ。そんな原田さんの一番の大仕事は後継者づくり。日本の経営者が一番苦手なのが、世代交代の問題。でもそれがリーダーシップには必要です」と語ります。「みんな、ずーっと自分がやっていくつもりでいた?」と言われ、さすがに一同、苦笑い。最後は「みんなあんまりハウツー本読み過ぎちゃダメだよ、頭でっかちの要領いい大人にだけはならないで」というメッセージを残し、笑顔で会場を去りました。

当初目標としていた「彼の本には書かれてない生コメントを引き出そう」は、どうやら成功。質問も次の発言につながるものが相次いで、事前のグループワークで試行錯誤した効果があったようです。もっとも青木さんは「イントロで会の趣旨や目的の共有を明確にするべきでした」。

さすが17万人のバイトを抱えるマクドナルド社長。学生との会話もスムーズ。

11月8〜9日（第3回を終えて）

田平さん、岩本君、**good work, and good job!** 今日の振り返りお願いします。〈江島〉

まずお詫びから。 ずっと落ち込んでてすみません。組織であることを忘れていたことが一番の反省点です。**マイナスからは何も生まれない**ということを自覚しました。反省点としては、アイデアを出すだけで結論まで持っていけなかったこと、すなわち切り替えができなかったこと、タイムテーブルが終盤で守れずにずるずるいってしまったこと。〈田平〉

多くの人が発言でき、個々の言いたいことは北城さんに答えをもらえたと思う。しかし、意見をいいたい人に当てるだけでファシリとして**コントロールできてなかった。** 議論がおこるような反対意見を書いてる人を当てたりして広げていくべきだった。ある程度意見が出たときに**ゴール**に向けて**ギア**をもっとはっきりと入れ替えるべきだった。〈岩本〉

自分の力のなさや話下手がもろ前面に出てしまって本当にダメだなと…ちゃんと結果を残せなかったのが**悔しくて悔しくて**仕方がなかったです。またリベンジさせてください。今日みたいな自分とは少しずつさよならしていきたいです! 〈田平〉

2人とも今日は本当にお疲れ様。**よかった!** と感じた参加者も多かったのでは?今後の課題としては、企画にどれだけメンバーが関わろうとしたのかも**反省点。** グループの代表は江島氏ですが、団体はチームなので、みんなで創っていきたいですね(^^)僕も関われなかった部分は反省です(；´д｀) 〈青木〉

やったじゃん!**また成長できるじゃん!!** いい機会だ。次はきっとうまくいくよ。〈江島〉

長大生の友人から
フェイスブックで
このセッションの情報もらって。
最近の長大ってすごい!
熊本大も負けねーよってことで
乗り込んできました!

熊本大学から参加した3人組。

チームの炎はこれから

燃え上がる!

To the next stage

Nagasaki University Exciting Students

十二月五日

黒川　清氏

出る杭になるには?「とにかく、世界へ!」

実はプロジェクトのリーダーである江島さんは黒川さんの熱烈な信奉者。今回のトークセッションも「あの先生を学生に会わせたい」がそもそものきっかけ。建てたテーマは「Crazy Ones-We are the people of tomorrow-」。

クレイジーワンズ（出る杭）って何? どうしたらそうなれる? メンバーは手配りのチラシまで作り事前勉強会を開催して、挑みました。

「先生のお話にちょっとでも疑問があったら学生がつっこみますから」とファシリテーターの藤田さんと塚原啓司さん（医学部）。しかし始まってみるとまったくの黒川さんペース。一貫性を持った生き方とは何か。異分野の人とのコミュニケーションはどうしたらいいか。問いに返ってくる球が速すぎて見えない!?「大学出てずーっと同じ会社にいるなんて日本は異常。その価値観に縛られる前に、とにかく一ヵ月以上外国に行って友達作って、自分が何者かを紹介できるようになる。実際に会わないとダメ。バーチャルとリアルワールドは違う」。藤田さんは「私は今まで、どうしても海外に行かなくちゃいけないのかな?と思っていたけれど、すでに世界はボーダーレスなんですね」「そう、あなたたちの一番のセールスポイントは日本人であること。でもそれは日本じゃ活かせないでしょ?」確かに。「僕は日本で組織を変えたいんだけれど」という学生には一言「変わらないね（笑）、難しいし時間もかかる。海外に行く方が話が早い。そこで生まれた"健全な愛国心"をもって、橋になる。出る杭になる。すると日本は変わり始める」。学生「ホリエモンは出る杭ですよね?」「そうだね、彼のやったことはいい。でも謙虚さも哲学のバックボーンもないよ。世界の中で自分は何ができるのか…最後は心、それは勉強じゃわからないんだよ」――次々繰り出すメッセージはストレート。

参加した学生は終了後「本気出して海外行きますか」「背中押されちゃったね」と口ぐちに。黒川さん一流のオーラを少しでも感じてほしいというメンバーの目標は、かなりいい線で達成できたかもしれません。

「日本の将来はあなたたちにかかってるよ!」
By黒川さん

「学生たちのパワーに敬服します。寺島さんに早く見せたい」

さて、最初の白熱教室イベントから学生の動きを見守り、セッションにも時折顔を見せていた片峰学長に、最後にお聞きしました。

「大学主導じゃなくて、学生たちが自主的に動き出せるかどうか…、彼らは彼らで考えてよくやっていますね。実は前回のリレー講座のときに最後に登壇された金澤一郎先生がね、場内を見まわしながら『長崎大学の熱意もわかるが、肝心の若者があまり見えないですね』と言われて、ずっと頭にあったのは事実です。でも今年は、白熱プロジェクトの彼らのおかげで、リレー講座の学生の参加が一段と増えたでしょう。金澤さんに見せたいくらいだ。彼らがフェイスブックなどで流して、熊本や佐賀あたりからも来てるんだよ。あの動員力はすごいね。最終日の寺島実郎さんが楽しみですよ」。

十二月十九日ですね。それにしても、トークディスカッションをすることで学生はゲストにぐっと近づき、興味をもって本講演も聞き入っている、いい循環ができあがっています。

「あのプロジェクト、それから春に旗揚げした核兵器廃絶研究センターのRECNAサポーターなど、少しずつ動きが出てきてますね。これが今後どこまで上昇していくか。一番難しいのは、学生は中心メンバーが常に交代していくこと。そのなかで引き継ぎ、繋げていくことがこれからの課題だね」。

長大祭で毎回行われる「学長とのしゃべり場」など、長大では学生たちとコミュニケーションを持てるよう、積極的に場を作っています。

さて、白熱プロジェクトのメンバーは、最終回の寺島実郎氏とのトークセッションに向けて着々と準備中です。

リーダーの江島さんは語ります。「このシリーズでは、好きにやっていいと言っていただき、感謝しています。今後は、こういう動きを授業単位化してもらえると素晴らしいですね。黒川先生は『大学は学び合う場』とおっしゃっていました。学生自らが問題を発見し、解決法を考える。今回は正直、何が正解かわかりませんでした。しかし私たちが出ていく社会はそんなところではないでしょうか。だからこそ学生が考え行動するチャンスが必要なのだと思いました」。

長崎大学にまたひとつ、「熱くて元気な長大生」という新たな個性が誕生しました。

制作スケジュールの都合上、六回目の寺島実郎さんとのセッションについては、次号でご紹介いたします。

今、熱い! 長崎大学とケニア

第2弾

長崎大学
アフリカ教育研究拠点
Nagasaki University & Kenya

前号にひきつづき、アフリカ・ケニアにおける長崎大学の活躍ぶりをご紹介します。
前回は熱帯医学研究所の活動を中心にお伝えしましたが、
今回はそれに加え、他学部のプロジェクトの様子をご紹介しましょう。
ケニアでは保健医療の分野だけでなく、広く生活全体を改善するため、
新しい取り組みが求められています。そんなニーズに応えるために、
長大のさまざまな学部が動き始めました。

ビクトリア湖のそば、ホマベイの水辺では洗濯が行われていました。

ケニアからアフリカ全体へ 多国間協力の時代へシフト

Japan
Kenya
Africa

可能性の大地での長崎大学の存在感

約半世紀にわたり、ケニアを支援してきた長崎大学熱帯医学研究所。その信頼と実績を活かすべく、さらなる広がりを見せ始めたアフリカ拠点。そこを足掛かりに、近年、さまざまな学部がプロジェクトを組んで動き始めています。アフリカ拠点は今後どういう展開になるのか。熱帯医学研究所の竹内勤所長にお話をお聞きしました。

「日本全体で考えると、これまでアジア重視できたため、アフリカに対しては出遅れており、アメリカなどに水をあけられているのが現実です。中国の猛列な進出を考えても、近未来の対アフリカ外交は待ったなしの状態なんですね。そのなかで、ケニアでの活動実績を独自に約五十年積み重ねてきた長崎大学に注目が集まるのは必然です。そこで我々としては、ケニアの最先端のリソースを使って、今度はほかのアフリカの国々との多国間協力へシフトしていくことが次の展開となります」。

確かに、ケニアだけでいいのか?という問題はありますね。

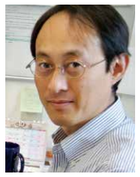
「例えばマラリア予防の研究も、皆川昇教授はケニアのみならずマラウィやルワンダをベースに展開していますし、橋爪真弘教授は南アフリカ。このチームはJAXA(宇宙航空研究開発機構)の衛星画像を使い、マラリア流行を予測する研究にとりかかっています。人材育成にしても、もっとアフリカの国と国の間で人が行き来してアフリカ人同士で切磋琢磨していく環境を整えることも大切です。そのために、アフリカからの留学生をより多く受け入れて技術を身に付けさせたい。また、個人のネットワーク、国の機関や研究所などをフル活用しながら、病気や研究テーマによってはイギリスやアメリカなど先進国ともフレキシブルに手を組んでいく時代に入りました」。

そういった各国とのつながりの場でもあるアフリカ拠点に、大学の他の学部の乗り入れが始まりました。それぞれの動きをご紹介しましょう。

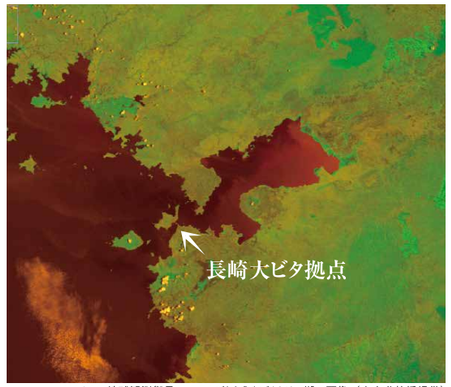
竹内 勤　熱帯医学研究所長

JAXA−熱研 マラリアプロジェクト

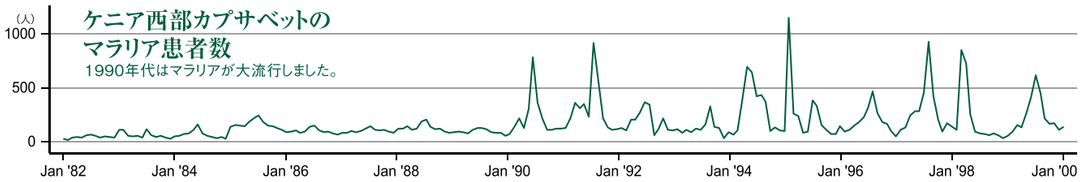
熱研・皆川教授と橋爪教授、そして工学部の森山雅雄准教授がJAXAと共同研究を進めているのが、人工衛星の地球観測データを有効活用して、マラリアの予測モデルを確立するというもの。気象や環境に密接に関係するマラリア。流行が予測できれば対策もたてられます。橋爪先生によれば、太平洋のエルニーニョ現象とは全く違う、インド洋のダイポールモード現象(インド洋東部の海面水温が上昇すること)が鍵ではないか、とも。今後は過去のデータと患者数を突き合わせていく作業に入ります。



プロジェクトを進める橋爪教授。



NASAの地球観測衛星TERRAがとらえたビクトリア湖の画像。(森山准教授提供)



大きいものは全長1～2メートルという淡水魚ナイルパーチ。しかしケニアで水揚げされるものは年々小型化しているのだそう。

湖のあちこちではこのようにホテイアオイが異常繁殖。この根にはコレラ菌がつくとも言われています。

漁業活性化プロジェクト提案

水産学部

アフリカの食の改善のキーワードは「魚食」にあり

ケニアの漁業に長崎の技術を!

上の写真をご覧ください。見渡す限りの緑の草原……実はこれ、水面に異常繁殖したホテイアオイなのです。ケニア西部のビクトリア湖は、九州の二倍ほどの広さを持ち、ケニアの他、タンザニアやウガンダなどの国と接しています。ナイルパーチの漁場としても有名で、ケニアでも、この地域は漁業が主な産業。しかし近年、乱獲で漁場が荒れたり、ホテイアオイに閉じ込められて舟が出せなくなるなど、漁業に悪影響が出始めました。水質の悪化も懸念され、地元でも苦慮しています。

そんな折、昨年八月、ビクトリア湖そばの都市キスムで、首相府肝いりで環境・天然資源省が主催する会議が開催。そこで長崎大学の水産学部と工学部の研究者がプレゼンテーションを行ったのです。登壇した水産学部の松下吉樹准教授は語ります。「手ごたえは非常にありましたね。数年前からケニア入りして見えてきたのは、我々がこれまで蓄積してきた水産学の知識や技術が活かせるという確信です。ビクトリア湖は本来豊かな漁場ですから、個人の漁からグループでの定置網に切り替えれば持続可能な漁業ができます。ナイルパーチも養殖することで輸出だけではなく国内需要もまかなえる。そのための加工流通の提案など、各分野の研究者が貢献できそうです」。ナイルパーチの養殖は、これまで現地で試みられたものの成功に至っていません。専門の萩原教授にもお聞きしました。「採卵や幼生飼育は、恐らくそれほど難しくはないでしょう。淡水魚の多くは、海のものより簡単です。ただ、現地にそれだけのインフラが整っているかという問題点はあります。ケニアの若手研究者を日本に呼び、養殖の基礎を身に付けてもらうなど、人を育てていかなければ」。大村湾の富栄養化問題をずっと手掛けてきた中田英昭教授もチームに加わっています。「ケニアのニャンザ湾は、大村湾によく似てますね。まずは水域環境の調査を土台としながら、地域の方々とも連携していく必要があります」。

肉に比べ、これまで魚を食料として重要視してこなかったアフリカ。貧困問題や栄養改善の解決の糸口は魚食にある、と先生方はやる気満々。今後、プロジェクト推進のための現地セミナーなどを行っていきます。

戦略を練る先生がた。左から中田教授、松下准教授、萩原教授。

インド洋に面したガジの養殖場で大切に育てた魚を集める人々。

キスムの市場に並ぶ「ごちそう」ティラピア。唐揚げにして食べます。

ビクトリア湖そばのビタ。約4万人の漁業者のほとんどが、帆や櫂を使う舟で漁をします。

ビタの漁村の市場の一画にあった給水所。JICAの協力で設置されました。

キスムで行われた地元説明会でプレゼンテーションする板山教授。

ケニアに適した水質改善装置を計画

工学部

安全な水。それはアフリカにとって最大・最重要テーマ

現地調達できる素材で水を浄化する

ケニアに限らずアフリカでよく見られるのが、頭の上に水桶を載せて歩く女性や子どもの姿。水運びは生活に欠かせない毎日の重労働なのです。それも、給水所の水ならまだしも、不衛生な湖の水を飲料水に使う人も多く、それによって感染症流行や乳幼児の死亡などが引き起こされます。この水問題に乗り出しているのが工学部。前出のキスムでプレゼンテーションを行った板山朋聡教授にお話を伺いました。「安全な水が日常的に供給されるのはこの国では十%程度。私も視察して実感したのですが、ビクトリア湖周辺も人口増加に上下水道施設が追い付いていないのです。一方、水の浄化や再利用はアジアでは取り組みが進んでおり、現に私のチームではタイやバングラデシュでの成功例があり、応用できそうです」。安全な生活用水のための簡易浄水・再利用システムは、太陽熱を利用したもので、医療用の精製水と保冷も行える画期的なもの。「しかし大切なのは、現地で手に入る水処理剤、例えば農業廃棄物から作る多孔性バイオカーボンやセラミックスなどを利用して、持続性を担保することが大切です」。確かに、先進国が送り込んだ最新機器や設備が故障したまま放置されてしまうのがアフリカでは日常茶飯事。板山先生は、それを避けるために現地の人のメンテナンスを重要視します。

小さなみかんより大きなザボンを

学部長の石松先生も語ります。「同時に行いたいのが、ケニアで普及率の高い携帯電話を活用した、住民参加型の”水と人の見守り”です。妊産婦や母子の健康状態を把握したり、水の衛生状態をチェックしていくもので、長崎で離島へき地の高齢者の見守りのために研究した技術を活用できるのでは、と考えています。ケニアには地域によって女性の地域健康推進員によるボランティア組織があり、彼女たちがシステムを学んで、見守りの一端を担えるようになれば素晴らしい。幸い、長大の医学部保健学科には、アフリカや南米で現場経験を積んだ先生方がおられる。連携して普及教育を担ってもらえればと期待しているところです」。

前号でもお伝えしたように、ケニアでは長年、熱研のチームによる静態・動態調査の実績があり、地域のボランティア女性たちとの強いきずなも結ばれています。ここに工学部の技術と、保健予防のプロフェッショナルを育てる保健学科が加われば、過去にあまり例のない工学+保健の連携プレーが可能になります。「工学部は技術屋で、テクノロジーはバラバラの方向を向いている傾向がありますが、ケニアという現場を与えられることで選択と集中が可能になる。小さいみかんをたくさん作るより、大きなザボンを一つドカンと作るイメージです」と石松先生。なるほど、それは学部間の連携にも言えるのかもしれませんね。

ボランティアの地域健康推進員たち。

上水道施設の水、これから浄化されます。

水を運ぶ子ども。

湖の水を汲みにきていた男性

タイで実験中の水浄化装置。

インタビュー

ムトゥンギ・ジョウ・キマンテイさん(左)
アドゥンゴ・フェルディナードさん(右)

長崎で学んだ最新テクノロジーを早くアフリカの現場で活かしたい!

現在、長崎大学では、アフリカからの留学生37名が学んでいます。そのなかでも圧倒的に多いのがケニアからの14名。来日4年目のムトゥンギさんはマラリア原虫の生態を調べる分子細胞生物学を勉強中。「今はまだマラリアのワクチンはなく、薬も副作用が多いのです。そこでマラリア原虫のなかのどの分子が人間を攻撃するのかを研究し、治療に役立てます」。

アドゥンゴさんはケニアのブシアにできる感染症ラボ勤務のために、熱帯ウイルス病学を学んでいます。「機器の扱い方や技術など、最新テクノロジーを身に付けたいですね」。関西空港に到着したその日は、英語が通じないばかりに何も食べずに一夜を明かしたのが忘れられない、とムトゥンギさん。今では日本語も上達し、他の留学生との仲介役「チューター」を務めるほどに。来日して数ヵ月のアドゥンゴさんは「言葉が通じなくても、長崎では誰かが助けてくれますね」。生の魚介類を食べた経験のなかった二人。回転寿司のネタを写真に撮ってはケニアの友人に送り「何これ!」と驚かせるのが楽しい、とも。カルチャーショックを体験しつつ、懸命に勉強しています。

長大祭のイベントではアフリカの留学生がダンスを披露。素晴らしいステップに場内総立ちで大盛り上がり!

歯学部

歯科医のいない地域の口腔健康を探る

子どもの歯は世界最良の健康さ。大人の歯は逆にボロボロ

ケニアの歯科医と協力しながら調査する藤原守助教。

口腔健康調査の後は歯ブラシ配布。

都市化の前にやるべきプログラム

「とにかく驚きました。日本の子どもはもとより、北欧などよりずっと歯の状態がいいんですよ」そう教えてくれたのは、歯学部の林善彦学部長。実は先生方は昨年から三回に分けてケニア入りし、ビクトリア湖周辺の田舎の小学校で口腔健康調査を実施したのです。歯科の世界基準に合わせ十二歳の児童を対象に調べた結果、虫歯も少なく、非常に健康な状態だったのだとか。「田舎で貧しいこともあり、砂糖の摂取が限られているからでしょう。次に彼らの親世代、大人を診てみると、逆に七割がた虫歯や歯槽膿漏などで歯がないなど、ひどい状況であることが明らかになりました」。そもそもケニアには歯科医が極端に少なく、ゼロの地域も多いのだそうです。しかし、どの段階で突然歯が悪くなるのか?・六十五歳以上ではどうか?フッ素と斑状歯（歯の表面に斑点が出て劣化する）の関係など、調査したいことはまだまだあるとか。「ビタの中心部になると、子どもでも虫歯の率は上がってきます。今後、急速に都市化していく過程のなかで、どう変わっていくのか心配です」と林先生。健診の後は歯ブラシを配布。正しい磨き方などの実習も行いました。「子どもに教えれば、それが家族に広がるので効果的です。でも一過性では意味がない。観察していると、歯ブラシ代わりに木の枝のようなものを使う人もいて、それはそれで効果があるのかもしれません。今後も長期的に関わっていきながら、ケニアに合った口腔衛生プログラムを広げていく必要性がありますね」。

口腔と食生活、そして社会環境を広い意味でとらえ、見直していく作業は今始まったばかりです。

熱帯医学研究所の竹内所長は語ります。

「アフリカは夢が多い。秘められた可能性もたくさんあります。これから、世界で活躍したいと希望に燃える学生たちに注目していただきたいですね」。

世界の現場で活躍できるタフな人材になるための「はじめの一歩」。長崎大学には、その環境が整いつつあるのです。

写真右／木の枝を歯ブラシ代わりに。 中／歯ブラシもらったよ!と大ハシャギの子どもたち。 左／チームの先生方はみんな「現地の子どもたちの笑顔がとにかく素晴らしいんだよ」と口ぐちに語ります。

インタビュー

ガンガ伸子教授
教育学部

キクユ族の名づけを手掛かりにケニアの家族意識と経済を探る

ケニア人の男性と結婚したことをきっかけに、キクユ族(ケニアでは最多)の研究をしているのが、教育学部のガンガ伸子教授。「そもそも結婚して私の苗字が何になるのか?という興味が始まりでした。キクユ族の名前はファースト・ミドル・ファミリーネームの3つで構成されていて、祖父や祖母、両親の名前を継ぐ順番など細かく決められているのです。そのほか同じ年に割礼をした同世代共通の名前も別にあります。その時々の天災や新しい制度など、世相を反映したネーミングもあり、大変興味深いんですよ」とガンガ先生。ご主人に「これ、どういう意味なの?」と聞いているうちにどんどんのめりこんでいったとか。外部からの調査じゃない、身内ならではの気安さも幸いしたのだそう。「固有の文字を持たなかった民族が、人名によって歴史を継承していく仕組みなんですね。また、同じ敷地内に複数の家族が住む親族集団が経済をささえあっている。研究をしているうちに、私の専門である家族社会学に通じることが見えてきました」。近く論文を発表するという先生に、大いに注目したいですね。

ケニアの結婚には婚資がやりとりされるそう。結婚式で「あなたは羊を何頭もらった?」と聞かれた、と愉快そうに笑う先生とガンガ氏。

左から2番目の齊藤さんの右隣は、同じく拠点を支えるスタッフ、坂田忠久主任。

齊藤幸枝

Saito Yukie

さいとうゆきえ。長崎大学熱帯医学研究所アフリカ拠点総務勤務。総務・人事総括。北海道出身。地元の短大を卒業後、広告代理店勤務。その時出会ったケニア人の男性と結婚、ともにケニアへ。日本航空、南アフリカ日本大使館、JICAなどを経て2009年より現職。

日本でもケニアでも就職は〈縁〉です

アフリカ拠点のお母さんは、あの小説の主人公の…

「この人がいないと、アフリカ拠点は立ち行かない。そのくらい大切な存在です」。一瀬休生拠点長をして、そう言わしめる女性職員が、ケニアにある長崎大学の拠点で働いています。それが齊藤幸枝さん。

「それは言い過ぎでしょう!(笑) 私の仕事は、拠点で雇用されているスタッフ五十四名(九割以上ケニア人)の人事的な管理や、関係各所とのやりとりの実務、ケニアに来られる先生方の旅行手配、そして庭の植え込みから機材まで、設備の管理を担当しています」。

小さなことから大きなことまで。まさに拠点のお母さん! アフリカ歴二十四年だそうで。

「これまでの経験が生きています。ケニアの場合、連絡一つにしても電話や郵便より"レター"、つまり書類を直接やりとりして確認スタンプをもらうのが一般的です。日本の十倍くらい手間がかかるんですよ。ビザ申請などの公的な書類も、ケニアの法律にのっとって作成するので慣れるまで大変です」。

パートナーはケニアの方と聞きました。ここに至るまでの経緯が気になります。

「もともとは北海道出身。広告代理店で働いていたころ、留学していた今の主人と知り合いました。結婚してケニアや南アフリカへ。その間、旅行代理店、日本航空ナイロビ支店、南アフリカ日本大使館、JICAケニア事務所に勤務。二〇〇九年四月からこの拠点で働いています」。

日本航空ナイロビ支店といえば、もしやあの、山崎豊子原作で映画化された『沈まぬ太陽』の…?

「はい、モデルといわれる方が支店長で、三年ほど彼の下で働きました。映画で主演された渡辺謙さんほど濃くない、上品でハンサムな方でした(笑)」。

なんと! それにしてもご主人との出会いは日本で、それから結婚後もずっと仕事を続けてきたんですね。

「友人は無謀だと(笑)。人生は選択の連続、決めたら進むのみ。選ばなかった道のことは考えません。そもそも私の短大卒業時はすごい就職難で、日本、ケニア、南アフリカと環境が変わるたびに、職探し、面接、落ちてまた受けての繰り返し。五十社以上受けましたね。だから今の学生の就活の苦しみはよくわかります。でも、就職って縁。落ちてもめげないでトライ、そのうち必ず何かがきっかけで縁に恵まれるんだから、全然悩むことない!と私は皆さんにエールを送りたい。私の最初の勤務先なんて、三月三十一日に面接に行って決まったんですから! とにかく早めにいって一番手で受けたら、後から『百人以上面接してたら訳がわからなくなった、一番最初のあなたは覚えてるから』と」。

「休みの日は、動物好きの主人がボランティアで参加している活動についていきます。ナショナルパークで野生動物の数を数えるんですよ」。いかにもケニアならでは! 園内ではバーベキューなども楽しめるんだとか。これはその時の様子で、撮影者はもちろん最愛のパートナー!

齊藤さんほどのキャリアの持ち主の言葉は、重みが違いますね。

「海外での職探しはさらに困難。私はチャンスがあったら必ず面接を受けていました。だって英語での面接の機会って貴重な体験でしょ。くせのある英語や会話の練習と思えばいい。そうしているうち、憧れていたキャセイパシフィックと、日本大使館の両方からの誘いが同じ日に舞い込んで…嬉しかったですね。そういうものですよ」。

停電も断水ものりこえてサバイバルも日常に

齊藤さんの一日は早朝四時四十五分に始まります。掃除、洗濯をこなし、ナイロビ名物の交通渋滞が始まる八時前には拠点事務所に出勤します。

「ケニアでは、奥さんたちも外で仕事を持って、家事はメイドにさせるのが普通。でも私はそれが嫌だったので家事も自分で全部やります。昔は仕事から帰ってくると、やれ停電だ、断水だ、どっと疲れて落ち込むこともありましたが、慣れれば『雨がふってきたからタライを外に出そう』。今はだいぶマシになりました」。拠点からほど近いお住まいでご主人と二人暮らしの日々。

「彼は私にとって大切な家族。世界の平和って、世界中の人がすぐ側の人を大切にできればきっと実現するはず。私は多くは望まず、すぐ側にいる誰かを大切にしていきたい」。

「生き延びるために目の前にあるものをつかみ取っていくサバイバルです」と笑う齊藤さんのタフさと明るさが、まぶしい。アフリカ拠点がこれから大きく展開していくための基盤づくりには、こういった太陽のような人材が欠かせないのですね。

働くウーマン奮戦記

大学はわたしの仕事場 4

長崎大学で働く女性教職員の活躍ぶりを毎回お一人ずつ紹介します。ステキな先輩たちの後ろ姿を見て女子学生も何かを感じて欲しい。そんな願いをこめたコーナーです。

Information

2013　1月～4月

入学試験情報

大学入試センター試験

試　験　日	1月19日(土)、20日(日)

長崎大学一般入試

区　　分	出願期間	試　験　日	合格者発表
前期日程試験	1月28日(月)～2月6日(水)	2月25日(月) ※	3月8日(金)
後期日程試験		3月12日(火)	3月21日(木)

※医学部医学科は26日(火)も実施

詳しくはWebで　→http://www.nagasaki-u.ac.jp/nyugaku/admission/index.html

卒業式

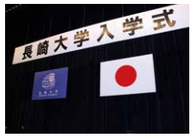
日時　3月25日(月)10時～

場所　長崎ブリックホール

入学式

日時　4月2日(火)10時～

場所　長崎ブリックホール



平成25年度
未来の科学者養成講座　受講生募集

ノーベル賞を夢見る子、理科や算数(数学)好きで得意な子、長崎大学に集合!　長崎大学では小学5年生から中学3年生を対象に「未来の科学者養成講座」を行っています。算数や理科、情報、物理などさまざまな専門分野の研究者によるプログラムが楽しく学べます。学校ではなかなか体験できない演習や実験もあり、毎年大好評。年間を通したプログラムで、受講生は各コース10名定員。課題作文や面接などで決定されます。来年度のプログラムは3月半ばに発表。募集期間は3月末～4月中旬の予定です。

問い合わせ・申し込み先　※3月半ば以降の対応となります。

長崎大学学生支援部教育支援課(未来の科学者養成講座)

TEL.095-819-2184　FAX.095-819-2073

E-mail　mirai@ml.nagasaki-u.ac.jp

申し込み方法・E-mailまたはFAX

申込方法や最新情報など、詳しくは長崎大学のホームページをご覧ください。

http://www.nagasaki-u.ac.jp/index.html

プレゼントクイズ

長崎大学通クイズ

長崎大学に関する知る人ぞ知る新事実が続々登場するクイズです。
さあ、あなたはどれが本当だと思いますか?

平成24年度長大祭で、
本当にあった出し物はどれでしょう。

就活を占い
「内定クッキー」を
あげる手相占い

1

キャンパス内の
池のカメの数をあてる
クイズ大会

2

テーマ
「パレット」にちなんだ
ボディペインティング
体験館

3

解答は挟み込みのハガキにご記入のうえ、郵送してください(アンケート内容もしっかりご記入ください)。正解者の中から抽選で5名の方に長崎県産品をプレゼント!

前号の答え

Q 長大の校舎に実際にあるのは?

③ 薬学部のロビーにある
分子構造の形の蛍光灯

10年ほど前に薬学部の校舎をリニューアルしたときに、ロビーの蛍光灯を化学式を模した六角形に取り付けました。当時の先生方にも好評だったとか。ちなみにこの形はロビーだけ。実験室などは決められた照度を保つため、できませんでした。

今回のプレゼント

日本最古の唐寺、興福寺のPRの意味をこめた「こうふくまんじう」は、隠元和尚にちなんだ赤インゲンの餡入りの月餅。境内の樹齢400年のソテツの実と同じハート型をモチーフに、仏手柑のようなレモンの香りをつけました。第43回長崎県特産品新作展　菓子・スイーツ部門奨励賞を受賞。今回は、正解者の中から5名の方に、この中華菓子詰め合わせをプレゼント。

見た目も可愛らしい「こうふくまんじう」に、おなじみの中華菓子よりより と、金銭餅の詰め合わせ。老舗の菓子店らしい、昔ながらの香ばしい歯ごたえです。

提供／萬順製菓　TEL.095-824-0477

長崎県物産館　TEL.095-821-6580　http://www.e-nagasaki.com/contents/n_bussan/

長崎大学広報誌

［チョーホー］
Choho
Vol.42

編集後記

学生に対する世間一般の印象は、おとなしくて積極性に欠けるため、それらを象徴するように『草食系』なる言葉が使われているようです。そんな印象を払拭してくれる学生諸君が、長崎大学にいることを学生自ら証明してくれました。

特集は「長大生リレー講座に挑む」。「長崎からグローバルを考える」というテーマで、各界から招いたゲストとのトークセッションを学生が企画し、対談の様子を生中継さながらにお伝えするものです。うれしかったのは、今回参加した学生諸君は、自分たちが卒業した後の継続性も考えて、回を重ねるごとに後輩たちを巻き込みながら輪を広げていることです。長崎大学からは、これまで以上にグローバル社会で活躍してくれる人材が育っていることを確信いたしました。

「今、熱い! 長崎大学とケニア」の第二弾もお楽しみください。

（原田哲夫）

［編集・発行］
Choho企画編集会議

編集長

原田　哲夫　広報戦略本部副本部長 工学研究科 教授

編集委員

堀内　伊吹　副学長、教育学部 教授
吉田　高文　経済学部 教授
相樂　隆正　工学研究科 教授
松下　吉樹　水産・環境科学総合研究科 准教授
池田　幸恵　水産・環境科学総合研究科 准教授
小林　信之　医歯薬学総合研究科 教授
堀尾　政博　熱帯医学研究所 教授
佐々木　均　病院 教授
浦　啓一郎　やってみゅーでスク コミュニティ・ライフ・アドバイザー
深尾　典男　副学長、広報戦略本部本部長 教授
長友　佳織　広報戦略本部 主査
西村　司郎　広報戦略本部 専門職員
高藏　祐亮　広報戦略本部
田村　匠平　広報戦略本部

編集　川良　真理
デザイン　三浦　秀樹
企画編集アドバイザー　浅野　眞

TEL.095-819-2007
FAX.095-819-2156
〈E-mail〉
www_admin@ml.nagasaki-u.ac.jp

［発行日］2013年1月1日